

(時時刻刻) 志賀原発、リスク露呈 原子力規制委員会、能登地震の知見収集を指示

「能登半島地震によって北陸電力志賀（しか）原発（石川県志賀町）は、施設にトラブルが生じた。原子力規制委員会は 1 月 10 日、今後の原発の審査や安全対策の議論を始め、再稼働に向けて審査中の 2 号機について、今回の地震の知見を収集するよう原子力規制庁に指示。さらなるリスク評価などが迫られる情勢だ。

この日の規制委の定例会では、地震の審査を担当する石渡明委員が「今回の地震は余震の震源域が 150 キロかそれ以上。いくつかの断層が連動して動いている可能性がある。専門家の研究をフォローし、審査にいかす必要がある」と語った。

規制委の山中伸介委員長は定例会後の記者会見で、2 号機の審査について「新知見かどうかを確定させるまでに年単位の時間がかかる。審査はそれ以上かかると思う」との見通しを示した。

原発の電源設備も議論になった。外部電源を受けるための変圧器が損傷し、油漏れが相次いで発生。普段とは別の系統の外部電源に切り替えた。漏れた油は計 2 万リットル以上にのぼり、一部は側溝から海に流れ出たとみられる。

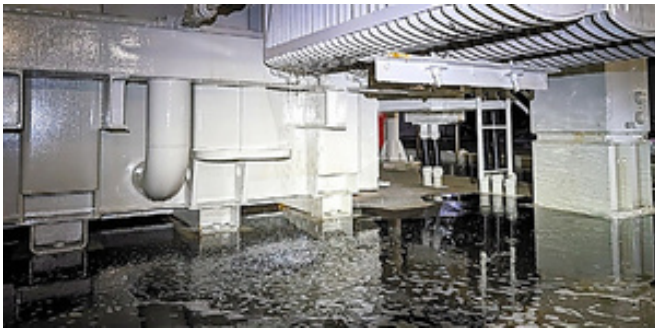
新規制基準は、鉄塔の倒壊などで外部電源を失った東京電力福島第一原発事故の経験から、原発内で非常用発電機や電源車を確保するよう求めている。鉄塔など原発の外の設備の耐震性を高めるのは限界があるという考えだが、今回は原発内の変圧器だったため、問題視する声が相次いだ。

原子炉安全工学が専門の杉山智之委員は「変圧器がどういう理由で壊れたのか。いま生き残っている変圧器も、今後の地震で壊れる可能性があるのでは」と指摘し、原因究明を急ぐよう求めた。

定例会では、志賀原発 1、2 号機の旧原子力安全・保安院時代の揺れに関する想定を一部でわずかに上回ったことも規制庁から報告された。上回った周期帯は、原子炉建屋や圧力容器など重要施設が揺れやすい周期ではなく、安全上の問題はないという。

また、地震後、志賀原発の周囲で放射線量を測るモニタリングポスト 116 カ所のうち、主に北側 15 キロ以遠の 18 カ所で欠測の状態になった。徐々に欠測は減少し、10 日午前 10 時 50 分時点の欠測は 7 カ所。うち 5 カ所は代替りのモニタリングポストを設置したという。

地震の影響の発表について、北陸電力は訂正を重ねた。経済産業省は 10 日までに正確な情報発信をするよう指示した。(矢田文、佐々木凌) (「朝日新聞デジタル」2024 年 1 月 11 日 5 時 00 分)



志賀原発 1号機の変圧器のまわりには、漏れた油が広がっていたという = 北陸電力提供



北陸電力志賀原発の断層

■能登半島地震による志賀原発への主な影響（北陸電力と原子力規制庁の資料から）

- ◆ 1、2号機ともに、旧原子力安全・保安院時代の揺れに関する想定を一部でわずかに上回った
- ◆ 1号機使用済み燃料プールの冷却ポンプが地震後に約 40 分間停止。672 体ある使用済み核燃料を冷やせない状態になったが、水温の上昇はなかった
- ◆ 1、2号機ともに、外部電源を受ける一部の変圧器が故障。別系統の外部電源からの受電に切り替えた。計 2 万リットル以上の油が漏れた
- ◆ 原発前の海面で油膜を確認。2号機の変圧器から漏れた油が流出した可能性が高い
- ◆ 1号機で約 95 リットル、2号機で約 326 リットルの水が燃料プールからこぼれた。放射能の総量は約 1 万 7,100 ベクレルと約 4,600 ベクレルで、外部への影響はなかったという
- ◆ 海側に設置した波高計などから高さ約 3 メートルの津波を確認。敷地は標高 11 メートルで影響はなかったという
- ◆ 津波対策として、海水を引き込んでいる水槽の周囲に設けた高さ約 4 メートルの防潮壁の一部が数センチ傾く
- ◆ 1号機原子炉建屋近くで道路の段差が発生